

論 文

# 「南京の基督」に見る芥川龍之介の 植民地主義批判

—— その限界と可能性をめぐる ——

胡 逸 蝶

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Interpreting criticism of colonialism through *The Christ of Nanjing*:  
the non-thoroughness and potential for criticism of colonialism

HU Yidie

**Abstract:** The setting of the book *The Christ of Nanjing* is the semi-colonization of China by Japan in the 1920s. This book reflected the understanding of Chinese society and criticism of colonialism by Ryunosuke Akutagawa; however, a review of this work shows it to be insufficient for a thorough criticism of colonialism. My research started with the metaphor of syphilis that was featured in *The Christ of Nanjing*. After learning that syphilis was transmitted from the American continent to Europe during the European colonization and domination of the Americas after Columbus's voyage, Akutagawa consciously defined the disease transmitted from a Chinese woman to a mixed-heritage Japanese-Americans as syphilis. From this point, the thought can be distinctly inferred that Akutagawa regarded the opposing relationship between China and Japan as the relationship between a dominated state and an empire. Moreover, syphilis, which resulted in madness in those of mixed-heritage was a metaphor for danger from the dominated China, which had not been realized by imperialist states. Nevertheless, the book's traveler from Japan who contacted the Chinese prostitute Jinhua Song was not infected with syphilis like those of mixed heritage. In view of this, the Japanese traveler represented only Japan while the mixed-heritage Japanese-American represented westernized Japan. Akutagawa may have found a new way to treat colonialism according to the way the Japanese traveler behaved with Jinhua Song. He simulated and criticized the colonization policy, thought that it would destroy Chinese civilization, and that Chinese people might resist. However, Akutagawa only raised doubts about the appropriateness of colonization but did not condemn colonialism. This explains the lack of thoroughness of its criticism of colonization.

**Keywords:** Colonialism; Colonial policy; Syphilis; Non-thoroughness

## はじめに

「南京の基督」は1920年1月に『中央公論』に発表され、翌年3月に新潮社刊行の作品集『夜來の花』に収録された、400字詰の原稿用紙にして20枚ほどの作品である。

宋金花というキリシタンの売春婦は、楊梅瘡にかかり、朋輩からお客に移せば治るといふ話を聞いたが、たとえ飢え死にしても客を取らないと決心した。しかし、ある夜、顔が十字架のキリスト像にそっくりの外国人に恍惚とし、身を委ねた。その夜キリストの夢を見、翌朝目覚めた時に自分の楊梅瘡が治ったことに気づいた。この夜に出会った外国人は南京に降ったキリストの化身だと宋金花は確信している。翌年春、彼女の部屋を訪ねた日本の旅行家にこの「奇跡」の話聞かせた。だが、旅行家は、知人の知り合いである、無頼漢の日本人とアメリカ人の混血児が南京の私娼を買い、寝ている間に金も払わず逃げ、悪性の梅毒を病んでとうとう発狂したという別の話を思い浮かべた。そのような「南京に降った基督」の物語である。

「南京の基督」は、従来宗教と人生の問題を考える作品として解読されてきたが、近年、コロニアルな文脈に注目する読解が現れ、植民地主義との関わりという視点から様々に論じられている。2005年、張如意は初めて当時の中国社会の視点から「南京の基督」を読み、金花を「社会の変動に翻弄され」<sup>1</sup>た人間だとし、芥川の社会現実に対する批評性を見出している。その後、秦剛は「南京の基督」を「植民地主義的意識の正当性を問ひかける物語機能を持つテキスト」<sup>2</sup>だと指摘し、また孔月<sup>3</sup>は時代情勢と関連付けて、金花とカトリック教との結びつきを1910年代におけるアメリカの中国での医療伝道から裏付けている。秦剛と孔月はともに、芥川は「南京の基督」によって植民地主義への批判を示したと指摘している。

稿者も、先行論と同じく、「南京の基督」から芥川の当時の植民地主義に対する批判意識が読み取れると考えている。しかし、その批判には限界があり、不徹底なものだとみる。芥川は自己の分身として、小説のなかで日本人旅行家という人物を創り上げた。日本人旅行家が事件の傍観者であるという設定を考慮すれば、支配国の男性という立場から一定の距離を置こうとし、客観的な傍観者の立場に立とうとする芥川の姿勢も窺える。だが、日本人旅行家はやはりコロニアルな視線を免れえず、見下すような目線で金花を見ていることから、芥川も支配する側の限定された視角を脱しきれないことが示唆さ

れるのである。芥川ははたして植民地主義の正当性そのものを疑っているのか、それとも当時の植民政策の妥当性を疑っているだけなのか。それは、植民地主義に対してどの程度批判しているかによって、大きく異なってくる。稿者は芥川の批判は後者だと考えており、その意味において、先行研究での芥川の批判の限界に関する考察は不十分だとみている。

「南京の基督」では、金花のかかった梅毒が結局混血児にうつされ、混血児を発狂させた。しかし、その病気は混血児と同じく金花の部屋に訪れた日本人旅行家にはうつらなかった。本稿は金花がかかった恐ろしい病気、つまり梅毒が何を隠喩しているのか、そして日本人旅行家はなぜ梅毒に感染しなかったのかを分析することによって、芥川の植民地に対する見方を再検討したい。

## 1. 隠喩としての「梅毒」

金花のかかった「梅毒」は大正期に淋病とともに恐るべき花柳病だと認識されており、その治療と予防に関しては医学的な文献が多数ある。

梅毒の症状として、初期に硬性下疳が生じ、それから全身梅毒を発するまでに潜伏期があり、その後、薔薇疹と呼ばれる全身性発疹が現れることがあり、やがて多くの臓器に腫瘍が発生したり、脳や神経を侵され麻痺狂痴呆症（発狂すること）が起こったり、時として死亡したりするとされている。<sup>4</sup>

また、梅毒の起源について、コロンブスがアメリカからヨーロッパに持ち込んだというのが今の通説であるが、日本では19世紀の医学文献にそれに関する記載がある。

1811年に出版された橋本伯寿の『梅字断毒論』には、梅毒の渡来について、このように説明されている。

明の弘治の末は後柏原天皇永正の始にあたり。スパンス人アメリカより此病を傳し後、數年を経て西洋買船の湊泊する広東に起しを広東瘡と名附たる其因縁こそあきらかなれ。

日本にも是を傳て其始は長崎に起こしならん。後奈良天皇弘治の比までは、すべて外国の船は泉州界の津又は筑前の博多、豊後の府内等に入津せしが、永祿十二己巳の年、始て長崎に入津することにさだまれり、梅瘡も此比長崎に傳しにや。今長崎にて梅瘡をボツクといふはかの阿蘭陀にいふスパンスボツクの略語なり。又今も九州にてすべて唐瘡といふはむかしの名の遺しなり。<sup>5</sup>

「後柏原天皇」治政下、「永正の始め」とは1504年、05年の頃であり、コロンブスが第4回航海を終え、アメリカ大陸からスペインに帰った頃である。「スペイン人がアメリカよりこの病気を伝えた」というのは、コロンブス航海によって梅毒がアメリカ大陸からスペインに持ち帰られたことを指しているに違いない。そして、ヨーロッパから中国、中国から日本へと伝わったのである。

大正時代になると、この渡来の過程はより広く知られ、新聞にもそれに関連するものが見られる。

1912年（大正元年）12月12日付の「読売新聞」朝刊の「葉書集」には、「梅毒はコロンブスのアメリカ発見でスペインに伝わる」という見出しをつけたコラムが掲載されている。

抑もこの戦慄すべき梅毒か何国の何人に依つて今日斯くも全世界に涉つて害毒を流しつつあるのであらうか之れ即ち亜米利加の土人から如何にして我国には流れ込みしか古来から梅毒がアメリカの土人間に存在してゐたらしい夫れが今より五百年許り前始めてコロンブスの亜米利加発見から西班牙に傳はつた夫れから伊太利に傳はりカーライル八世の伊太利遠征より佛蘭西は云ふに及ばず忽ちにして欧州全土に蔓延したこの恐ろしい害毒の我が国に流れ込んだのは永正九年即ちコロンブスの亜米利加発見から五十年以後である。

新聞に関連するコラムが載せてあることから、梅毒がコロンブスの航海によってアフリカ大陸からもたらされたものだという情報はごく少数の人しか知らないものではなく、梅毒に関心を持ち、梅毒の知識に詳しい人であれば、その情報を把握している可能性は高いと推測される。

芥川は友人・南部修太郎への書簡（1920年7月17日付）の中で、金花の梅毒についてこう述べている。「金花の梅毒が治る事は今日の科学では可能だ唯根治ではない外面的徴候は第一期から第二期へ第二期から第三期へ進む間に消滅するつまり平人同様となるのだからいくら君が治るものかと威張つても治るのだから仕方がない」<sup>6</sup>。すなわち、金花の症状が一時的になくなったことについて潜伏期に入るのだと説明している。これは、当時の医学的な文献に記載されている梅毒の潜伏期の内容と合致している。また、混血児が発狂したという設定も、梅毒末期の麻痺狂痴呆症によるものと考えられる。したがって、芥川は梅毒に関してある程度知識を持っていたと思われ、ひいては

梅毒に関する医学的な文献も調べたことがある可能性さえ見出せる。また、孔月は「<病>と植民地との出会い—芥川龍之介「南京の基督」論」の中で、芥川は二人の友人、神経梅毒の専門家であった斉藤茂吉と、日本における梅毒学の開祖である土肥慶蔵の弟子であり、東京大学で梅毒学を講じたことがある木下杢太郎から、梅毒に関する知識を獲得した可能性を指摘し、芥川は梅毒の知識や歴史に詳しくないと主張している<sup>7</sup>。そのような芥川が、梅毒がコロンブスのアメリカ大陸発見によって欧州に伝わり、そして欧州から中国、中国から日本に伝わったことを知らないはずはない。

コロンブスの航海をきっかけに、ヨーロッパによる他国、他民族を征服する事業が展開された。具体的な征服対象は最初アメリカ大陸であったが、その後、ヨーロッパによるアメリカ、アフリカ、アジアに対する植民地支配が拡大することにつながっていく。

中国が日本、そして欧米列強により半植民地化された 1920 年に、「南京の基督」の中で中国人女性から日本人とアメリカ人の混血児の男性にうつした病気として梅毒が選定された理由は、梅毒が被支配国から帝国に伝染したことにあると考えられる。その見地に立てば、<日本—中国> = <帝国—被支配国> という対立、そして両者の力関係を芥川は問題視していたと読むことができよう。

サム・キーンは『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』の中で、隠喩としての病原菌について、「およそ疾病はわれわれの外から襲いかかってくるものと考えられる。病原菌は、敵のように、もし防御をおろそかにすればわれわれを圧倒するであろう外部からの侵略者である<sup>8</sup>」と述べている。外からやってきて、そしてなおざりにすれば「われわれを圧倒する」ような巨大な破壊力を持っているのは、まさに梅毒の特徴である。

作品では金花が持っている梅毒は、卑しい病気であると同時に、非常に恐ろしい病気である。金花が「実際彼女の病んである証拠を示」せば、たとえ酔っていて、「無理に彼女を自由にしようとする」客も憚るほどだった。そして、金花の朋輩の陳山茶の話によって、彼女の姉に梅毒をうつされた客は、「おかげで目までつぶれた」。日本人旅行家の回想によって、金花に梅毒をうつされた混血児は、「とうとう発狂してしまった」。梅毒は人々に憚られ、人の目を潰し、人を発狂させるほどの恐ろしい病気なのである。

恐ろしい病気を持っている金花を第一次世界大戦後の半植民地化された中国の表象だとすれば、梅毒は帝国に意識されていない、被支配国としての中国に潜在する危険性を隠喩していると思われる。

この危険性を最も表現しているのは、金花の病気がアメリカ人と日本人の混血児にうつったという立場の逆転を物語る場面であることは言うまでもない。孔月は、小説の構図の逆転についてこう述べている。

本研究が強調する作者芥川のジャーナリスチックなまなざしが仕掛けたレトリックについて再度繰り返すとすると、「日本人と亜米利加人の混血児」と「日本人旅行家」に表象されるアメリカと日本の帝国主義的な欲望（政治的欲望）が、金花に表象される中国を植民地化（娼婦化）しようとする構図を、「病」（性病）を通して構図の逆転を試みた表象のテキストであったということである。<sup>9</sup>

金花の梅毒は、結局彼女がキリストだと思った日本人とアメリカ人の混血児に伝染し、その混血児を発狂させた。金花の体を占有し、金も払わず逃げた混血児は〈加害者〉であるはずだが、〈病〉により図らずも〈被害者〉となる。一方、誰にも危害を加えるつもりがない金花は、無意識的に〈被害者〉から〈加害者〉に変わる。金花は植民地の女を、混血児は帝国／列強の男を象徴すると見るなら、身体だけではなく、精神をも精神植民としてのキリスト教によって占有された植民地の女が、無意識のうちに逆に帝国／列強の男に噛みつき、情勢を反転させたという構図になる。芥川はこの反転によって植民地主義の危険性を警告している。このような構図の逆転に至るには、以下の二つの欠かせない条件がある。

一つは、混血児の金花から損害を蒙らないという安心感である。混血児が金花の部屋に入った後の様子は、このように描かれている。

客は彼女が当惑らしく、美しい眉をひそめたのを見ると、突然大声に笑ひながら、無造作に烏打帽を脱ぎ離して、よろよろこちらへ歩み寄つた。さうして卓テエブルの向うの椅子へ、腰が抜けたやうに尻を下した。金花はこの時この外国人の顔が、何時いつ何処どこと云ふ記憶はないにしても、確に見覚えがあるやうな、一種の親しみを感じ出した。客は無遠慮に盆の上の西瓜の種をつまみながら、と云つてそれを噛むでもなく、じろじろ金花を眺めてゐたが、やがて又妙な手真似まじりに、何か外国語をしやべり出した。その意味も彼女にはわからなかつたが、唯この外国人が彼女の商売に、多少の理解を持つてゐる事は、臆げながらも推測がついた。<sup>10</sup>

混血児は、リラックスして、楽しそうな様子である。ほかにも、混血児について、「上機嫌の笑ひ声を挙げ」、「愉快さう」、「うす笑ひを浮べ」などの描写があり、彼は始終、何の心配もなく、機嫌がよさそうにしている。後につづく場面でも、ある通信員に金花を買い、金も払わずに逃げた話を「得意らしく」話している。この気安い態度は、むしろアメリカと日本の中国での植民活動が円滑に進むという安心感を象徴しているのであろう。しかし、金花の病気が混血児にうつったという立場の逆転によって、その安心感は迂闊にすぎないという皮肉になる。従順な女性である金花に象徴される中国は無害な植民地に見えるが、実は危険な側面も持っている。混血児は金花が梅毒にかかっている事実を予想もしなかった。この挿話は、中国を植民地化する過程で得た利益が日本の目をくらまし、中国の危険な側面を見逃させ、ついに想定外の多大な損失を蒙らせることを暗示している。

もう一つは、金花のキリスト教への信仰である。1898年（明治31年）、長江沿いの八港が日本と欧米諸列強に開放され、1899年、南京港の開放に伴い下関も開港場となり、諸外国領事館、商社などが進出してきた。このような経済活動に伴い、精神植民の一環として宗教の布教活動も盛んになる。こうしたキリスト教の広まりを背景として、金花は五歳の時に洗礼を受けて信者になったと設定されている。欧米の布教によって金花が信心深いクリスチャンになり、信仰心の篤さゆえに顔がキリストとそっくりの混血児に恍惚として身を委ね、混血児に梅毒を感染させ、発狂させた。精神植民としてのキリスト教と金花の〈加害〉との間には因果関係がある。

しかし、キリスト教は1920年代前後において、性病を予防する手段の一つであると捉えられていた。山下安太郎『通俗淋病梅毒根治療法』の「梅毒豫防法」の一節にはこのようなくだりがある。

余の確信的に其奏効あらんと思考するものは彼の宗教的空氣呼吸之れなり宗教中にて最も適合せるは耶蘇教なり如何となれば耶蘇教は云ふまでもなく教則嚴重にして些々たる失策も神の前には罪科と認められ品行端正にして各自己の業務に熱誠なる者にあらざれば入教すること能はざる者なりと云ふ…（中略）…偏に宗教の教養に因るものならん是を以て考ふれば如何に宗教の効果の偉大なる只だ敬服の外なきなり故に吾人は花柳病豫防法の尤も絶大なる効力あるものは世人に宗教の訓戒を傳ひ以て根底より没倫行為を驅逐するに於ては則ち豫期以上の成果を得るは深く信じて疑はざる處なり<sup>11</sup>

また、加治時次郎も『性慾と道德並に性病の撲滅新論』の中で、道德、宗教により、本能を或る程度に制限することと性病の個人的な予防とを関連づけている<sup>12</sup>。

宗教、特にキリスト教は欲望を制限することを提唱し、快樂のための性行為を禁止するため、性病の予防に役立つとされていたが、金花はクリスチャンでありながら、娼婦であり、梅毒の伝播者でもある。クリスチャンではない日本人旅行家も通念として、キリスト教は売春を厳禁することを知っているが、五歳の時に洗礼を受けた金花は売春を父親と自分を養う手段であると安易に正当化し、キリストが絶対に許してくれると信じ込む。よって、金花は幼い頃に入教したが、まともに教義を学んだことがないと推測される。

戦争を背景にした布教は、単なる宗教上の宣伝ではなく、植民地への異文化の侵入、そして精神的に植民することでもある。植民地の人々に広まっていた教義も表面的なもの、あるいは変形したものであったかもしれない。キリスト教を信じながら、売春をし、そして梅毒を伝播し、人を発狂させる金花は、宗教的な視点で見れば、戦時中の特殊な形態の布教による異形の産物であると言えよう。ここから、芥川の欧米の布教への皮肉と批判も読み取れる。

帝国日本が逆に被支配国としての中国に噛みつかれるという危険性は、梅毒によって隠喩されている。では、この危険を回避する方法はあるのだろうか。芥川は実は作品の中で答えを出していると考えられる。〈金花＝植民地の女〉—〈混血児＝帝国／列強の男〉という一対の力関係の外には、日本人旅行家がいる。混血児は一度金花の部屋を訪れて梅毒をうつされたが、日本人旅行家は二度と金花の部屋を訪れても梅毒がうつらなかった。日本人旅行家は混血児と同じく金花の部屋（＝被支配国の領土）に踏み込んだが、大きな損失を蒙る混血児と異なり、梅毒の感染という危機を見事に避けることができた。それは何故であろうか。この点について、次の節で分析する。

## 2. 日本人旅行家はなぜ梅毒に感染しなかったか

日本人旅行家はなぜ梅毒に感染しなかったかを論じる前に、まず日本人旅行家と金花との間に肉体関係があったかどうかと言及する必要がある。この問題については、先行論において、溝部優実子の一篇を除き、旅行家と金花との間に肉体関係があることが自明視され、同じく娼婦の部屋を訪れた旅行



家と混血児との立場にある程度類似性があるとされている。

溝部優実子は「洋服の膝に軽々と小さな金花を抱いてみた」旅行家と金花の間には、娼婦の部屋であるにもかかわらず性的な匂いが払拭されている<sup>13</sup>と指摘し、日本人旅行家は金花にとって「庇護者」のようであり、二人は「父と娘の擬態」であると主張している。

稿者は日本人旅行家が金花の「庇護者」のようであるという見方は日本人旅行家が示した優しさが強調されすぎており、日本人旅行家を美化する傾向がややあると考えているが、日本人旅行家が金花の部屋に訪れた目的は性欲を充たすのではないという点で溝部と同意見である。

金花がかかった梅毒は患者を発狂させたり、死亡させたりする可能性を有した非常に恐ろしい性病である。感染経路で最も多いのは性行為であり、混血児はそれにより伝染し、発狂に至った。

物語の背景である 1920 年代には、コンドームの使用や薬品の塗布など物理的、化学的な梅毒の予防法がまだ普及しておらず、道徳的、法律的予防策のほうが多く宣伝され、重視されていた<sup>14</sup>。また、物理的、化学的予防策をとっても、百パーセント予防できるわけではない。日本人旅行家は金花と肉体関係を持っていたと仮定するなら、金花が梅毒にかかったことを知れば、ショックを受けないわけがない。しかし、日本人旅行家は少しも自分の体に対して心配を示さず、混血児の話金花に教えるべきかどうかだけを悩んでいた。したがって、日本人旅行家は金花と肉体関係を持っていないと推測できる。肉体関係がないため、日本人旅行家は金花に梅毒をうつされなかったのである。

では、日本人旅行家が金花の部屋に訪れた理由は何であろうか。彼が登場する場面を見てみる。

——さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。<sup>15</sup>

金花の部屋を訪れたのは、日本人旅行家の「物好き」な気質によるものである。つまり、好奇心に駆られるのである。中国人女性は、「上海の競馬」、「南部支那の風光」のようなエキゾチックな魅力をたたえた存在であり、日本人旅行家は異文化体験のため、中国人女性と接触しようとした。しかし、娼婦と一夜を過ごしたが肉体関係を持っていないという物語の設定はやはり無

理があることは否めない。この不自然な設定は、日本人旅行家を混血児と対照的な存在として作り上げるためにあると考えられる。

金花と混血児が過ごした一夜は、売春の現場である。露骨な金銭のやりとりと性行為に至るプロセスが詳しく描かれている。混血児は日本人旅行家と違い、金花を単なる欲望の対象として見、彼女と交流しようともせず、彼女の精神世界に関心を向けてはいない。

日本人旅行家は異文化体験を目的として金花の部屋を訪れ、そして彼女を愛おしく思う気持ちで「翡翠の耳環」を記念に彼女につける。一方、混血児は欲望を満たすことを目的として金花の部屋を訪れ、彼女の体を占有した後、金も払わずに逃げた。二人を対照的に見れば、日本人旅行家は明らかに混血児より金花に対し、優しく丁寧な態度で接している。日本人旅行家自身も混血児について、「男振りに似合はない、人の悪るさうな人間」<sup>16</sup> だという評価を下し、混血児のやり方に対して批判的な態度をとっている。

中村三春は、混血児の表象について、以下のように述べている。

恐らく、脱亜入欧的な近代日本の西洋に対するコンプレックスの凝縮されたイメージが、この混血児が金花を欺き、犯すという叙述には認められる。コロニアルな欲望が、ジェンダーの領域に投影されるのである。まず、日本と亜米利加という列強が集合して中国を植民地化（娼婦化）している図である。また、先の想像を援用するなら、そこには、日本と亜米利加との関係は対等ではなく、日本の追従性に対する自嘲も付加されることになる。<sup>17</sup>

中村は混血児を「脱亜入欧的な近代日本の西洋に対するコンプレックスの凝縮されたイメージ」、そしてアメリカ及びアメリカに追従する日本の植民地主義の表象だと捉えている。

混血児は西洋化されている日本、西洋を模倣している日本の表象である。日本人旅行家という比較的純粋なく日本への表象に比べれば、混血児は濃い西洋の影があるく日本への表象である。

西洋諸国にとって、中国はあくまでも他者であるが、日本にとって、中国は共通の文化的基盤を持つところであり、つまり同一性があるのである。したがって、日本は西洋諸国より、中国の文化へのアクセスは容易である。

日本人旅行家と混血児が金花の部屋を訪れた目的は、それぞれ異文化体験と欲望を満たすことにある。これによって、西洋より日本が被支配国として

の中国の文化を理解し、鑑賞する意欲があることが暗に示されているのではないと思われる。

混血児の金花の体への欲望は、外来の侵入者が現地の人々を支配する欲望につながる。混血児の赤裸々な欲望に比べれば、旅行家の欲望は表面に出されておらず、不明瞭なのである。

また、前述したように、当時キリスト教は性病の予防に役立つとされていたことと、金花はクリスチャンでありながら性病の伝播者になることとの矛盾から、精神植民の一環としての布教政策への芥川の皮肉が読み取れる。芥川は後年の格言集「侏儒の言葉」（1925年7月）の中で、西洋及び西洋に追隨する日本の中国に対する植民政策についてこう言っている。

蝨の幼虫は蝸牛を食う時に全然蝸牛を殺してはしまわぬ。いつも新しい肉を食う為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する蝨の態度と選ぶ所はない。<sup>18</sup>

蝸牛を殺すのではなく、新しい肉を食べるために蝸牛を麻痺させるという比喩は、中国の領土を侵しながら、布教などの手段によって異文化を侵入させ、中国の人々を精神まで支配しようとする西洋の姿を連想させる。混血児は顔が十字架のキリスト像に瓜二つであったからこそ金花の体だけではなく心をも征服することができた。またそれ故に梅毒をうつされ、発狂してしまった。金花という中国人がキリスト教の敬虔な信者になるのは西洋の精神植民の成果だが、この成果こそが逆に災いをもたらしたという皮肉めいた設定から、芥川が精神植民をしようとする西洋、そして西洋のやり方に真似をしようとする日本への批判が読み取れる。

作中に金花の「キリスト」に出会った夢が詳しく描かれている。「キリスト」は「緞子の蒲団を敷いた紫檀の椅子に」「鍮の水煙管を啣へながら、悠々と腰を下して」おり、金花に燕の巣、鮫の鱗、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海參の羹などたくさんの中華料理を御馳走した。まるで中国化されたキリスト像である。そして、「キリスト」は「私は支那料理は嫌ひだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ」<sup>19</sup>と語りかける。金花の思い描く中国化されたキリスト像は、金花がキリスト教文化に対して、実のところさほど理解していないことを示している。そして、中華料理を嫌い、中華料理を一度食べたこともない「キリ

スト」は、中国に足を踏み込み、中国人にキリスト教文化、西洋文化を宣伝しながらも、中国文化に目を向けようとも理解しようともしない西洋人の表象であると見なされる。中国人は西洋に対して、また西洋人は中国に対して、お互いに偏った認識を持っている。芥川にとって、それは決して帝国と被支配国との望ましい関係ではない。では、理想的な関係とはどのようなものであろう。日本人旅行家と金花との関係に、芥川が抱く帝国と被支配国とのより良い関係像が潜んでいると思われる。

日本人旅行家が芥川の分身であることは、すでに先行研究でしばしば指摘されている。そして、中村は「混血児だけでなく、混血児と金花との関係を見つめている旅行者その人も、同じくジェンダー＝コロニアルな視線を決して免れることはない<sup>20</sup>」と指摘している。つまり、日本人旅行家は事件の冷静な傍観者のように設定されているが、支配国の男性という立場から脱しきれないのである。

日本人旅行家の金花に向けた視線は、オリエンタリズムに満ちた視線である。彼は「無知」な金花を軽視しているが、「無垢」な金花を愛おしく思うのである。

彼が金花に、自分が知っている混血児の話を教えるかどうかを迷ったときの心理状況が分かる箇所がある。

しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」<sup>21</sup>

ここでの「蒙を啓いてやる」という言葉に注意を払いたい。「啓蒙」という語は常に「文明開化」を連想させる。日本人旅行家にとって、基督教に関しても梅毒に関しても基本的な知識を備えていない金花は、文化的に遅れている非文明人である。文明をめぐる上下関係の中で、彼は明らかに優位に立っている。

日本人旅行家にとって、無知な金花は可憐であるが、決して対等に会話できる存在ではない。あくまでも一つ上の階段から金花を見下ろしている。日本人男性の中国人女性に対する優越の意識は、帝国日本による被支配国としての中国への優越の意識と重なるのである。

その一方で、日本人旅行家は、金花の内面世界に干渉しようとしないうる姿勢を示している。金花のキリスト教について無知な答えを聞いても微笑するだけで反論せず、「真相」を金花に教えるべきかどうかについて迷っていたが、結局教えなかった。金花の「無知」に対する優越感があるが、その「無知」を容認している。中国の古典文化を尊重し、中国文化の独自性を保たせるといふ、西洋のやり方とは異なる、被支配国に対するもう一つの方法が、日本人旅行家の金花への態度によって提示されているのではないかと思われる。

芥川は元々西洋に憧れながら、東洋の旧き美に愛着を持っている人間である。王書瑋は、芥川が日本の「近代的な女性に失望し、中国女性に古典的な要素を求め」、「金花を伝統的な女性に創り上げた」ことを指摘している<sup>22</sup>。確かに、伝統的な女性像である金花に、芥川の近代以前の東洋の旧き美への懐古の情が潜んでいると見られる。金花という中国人女性は、従順な女性、そして他人を優先させ、他人のために犠牲を払い、献身することができる女性、つまりまだ近代化によってもたらされた「自我」という概念に目覚めていない女性として造形されている。近代以前の美しさを懐かしく思う芥川の心情、そしてまだ足を踏み入れている中国への、近代以前の美しさが保存されているという芥川の期待と幻想が窺える。そのような芥川が、中国をキリスト教文化に代表される西洋文化に同化させようとする西洋のやり方に反感を覚えることは当然であろう。

そして、半植民地化されていた中国が持つ危険性として考えられるのは、帝国への反抗という可能性である。精神の植民によって中国文化を侵食するより、中国固有の文化に干渉しないほうが、中国人の反感を買うこともなく、反抗され報復される「危険」も招かないという芥川の見方が、日本人旅行家が金花に体の関係を求めなかったために梅毒をうつされなかったという小説の設定から浮かび上がってくる。

日本人旅行家は金花に「蒙を啓いてやるべきであらうか」と迷ったあげく、結局何も言わなかった。日本人旅行家にとって、それは金花を「啓蒙」しないことであり、金花が「無知」であるという状況を変えず、そのまま放置することを意味する。金花を「啓蒙」しないことこそが、彼女に伝統的な美しさを残し、かつ日本人旅行家の優越が確保される手段となりうる。被支配国としての中国の古い文明と文化を保存させる方が、中国に旧き美が残され、そして帝国が近代化に遅れた中国より優位に立つことが保障され、さらによ

り温和な植民政策を選択した方が、帝国に対する中国の反抗を招きにくいという考え方が、「南京の基督」という作品から読み取れるのである。

## おわりに

本稿では、まず梅毒という隠喩について考察を行った。梅毒は、ヨーロッパによるアメリカ大陸の植民地化の歴史的過程の中で、被支配側としてのアメリカ大陸が支配側としてのヨーロッパにうつしたものの、つまり被支配国から帝国にうつしたものである。これこそが、中国が欧米列強と日本によって半植民地化された時代状況の下、作品の中で中国人女性から日本人とアメリカ人の混血児の男性にうつした病気に梅毒を選定した大きな理由であると考えられる。日本と中国の、〈帝国—被支配国〉としての対立関係、力関係を芥川は問題にしている。人を発狂させたり、死亡させたりする「恐ろしい病气」としての梅毒は、被支配国としての中国が孕む危険性の隠喩であろう。そして、1920年代当時、キリスト教は性病の予防に役立つとされていたことと、金花はクリスチャンでありながら性病の伝播者になることとの矛盾から、精神の植民の一環であった欧米の布教に対する芥川の皮肉と、植民地政策への批判が読み取れる。

また、梅毒に感染しなかった日本人旅行家を通して、帝国日本がその危険性を避ける可能性が示されている。西洋諸国の方策とは異なり、中国文化に干渉せず、文化の独自性を保たせるという、もう一つの被支配国に対する方法が、日本人旅行家による金花の扱い方によって提示されている。このようなよりくやさしい〈扱い方、よりく温和〉な植民政策のほうが、中国の反感を買わず、反抗される危険も招かず、そして中国の伝統的な美しさが壊されることなく維持され、日本の知識人にとって鑑賞や吟味の対象になることを、芥川は暗に示しているのではないかと思われる。

芥川の植民地主義批判の不徹底性は、植民地主義の正当性そのものを否定していないところにある。芥川の分身としての日本人旅行家は、見下すような目線で金花を見ている。日本人旅行家の金花に対する優越感、帝国が被支配国より優れているという植民活動を正当化する見方と連動するものである。また、金花に「蒙を啓いてやるべきであらうか」という日本人旅行家の躊躇いには、植民地支配は被支配国の近代化への開眼を促し、被植民者にとっても利益になるという考え方が透けて見える。芥川は、植民地主義の正当

性に対して多少の疑念を抱いてはいるが、その正当性を徹底的に否定することができない。

被支配国としての中国が有する危険性を、欧米列強はまだ意識せず、それに対する警戒心も持っておらず、結局不注意によって大きな損失を蒙るであろうという芥川の考えは、混血児が梅毒に感染し、発狂したという小説の設定から窺える。日本が西洋を模倣すれば同様の大きな損失を蒙るであろうと懸念する芥川は、小説の中で梅毒に感染しなかった日本人旅行家を通して、その危険を避ける方法を提示する。そこからさらに芥川の植民地主義批判の限界が指摘される。

ヨーロッパ及びヨーロッパに追従する日本が中国を植民地化しようとすることに対して、芥川の批判はあくまで中国文化が破壊されることへの批判にとどまる。幼い頃から中国の古典文学に興味を抱き、漢学の素養を持つ芥川は、憧れてきた中国の〈伝統的〉な美しさが植民地化される過程で滅びていき、中国文化が西洋文化に侵食されることに心を痛めている。だが、仮に中国文化を破壊しない植民地政策があれば、芥川はそれを批判するかどうかについては疑問の余地がある。

以上の芥川の植民地主義批判に関する考察は、芥川の反戦思想をめぐる議論へとつながっていく。

先行研究では、芥川は反戦、反軍的な姿勢を示し、平和を望んでいる作家だとされてきた<sup>23</sup>。芥川は1916年から1919年まで、海軍機関学校で教官を務めたことがある。諏訪三郎の「敗戦教官芥川龍之介」(『中央公論』1952年3月)には、芥川の教え子である篠崎磯治の回想が引かれている。

当時の機関学校の教材は、英文を印刷にしたものを用いており、その内容はことごとく勝利を謳歌する軍国主義的なものばかりで、英語を教えながら、生徒の士気を鼓舞激励するのねらいであつたが、芥川教官は新任匆匆それを一掃して、教材に用いるものは、すべてが敗戦の物語であり、衰亡の歴史であつた。それゆえ一部の生徒からは、反軍的であり娑婆くさいといわれて、早くも敗戦教官のニックネームを烙印された。…(中略)…「君達は、勝つことばかり教わつて、敗けることを少しも教わらない。ここに日本軍の在り方の大きな欠陥がある。むろん、敗けてはならない。しかし勝つためには、敗けることも考えるべきだ。さらにいうが、戦争というもの、勝つた国も敗けた国も、末路においては同じ結果である。多くの国民が悲惨な苦悩をなめさせられる。」

あたかも、欧州第一次世界大戦の最中であり、日本海軍は無敵海軍を誇示して、八八艦隊の出現に国幣の大半をかたむけて狂奔していたところで、若い文官教官芥川龍之介の発言は、武官教官や一部の学生をひどく刺戟させずにはおこなかつた。<sup>24</sup>

芥川の発言によって彼の反戦思想が示されたと見られているが、その反戦思想がどの程度のものなのか、再検討の必要があるだろう。「多くの国民が悲惨な苦悩をなめさせられる」と芥川は語っているが、戦争を引き起こした帝国日本が被支配国の国民に苦しみを与えたことを、芥川はどの程度意識しているか、そしてはたして帝国日本の戦争責任を芥川は問うのであろうか。

芥川の植民地主義に対する見方を検討するとき、彼の戦争への認識をも考量しなければならない。そして、彼の東洋観や西洋観とも関連づけた考察が求められるだろう。本稿は「南京の基督」を素材に、芥川の植民地主義について論じてきたが、戦争認識や東洋 / 西洋観と結びつけた広い視野での考察は、別稿に譲ることとしたい。

## 注

<sup>1</sup> 張如意『南京の基督』試論—芥川における中国社説認識—（『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』2005年3月）p. 82

<sup>2</sup> 秦剛「〈シンポジウム〉「南京の基督」を〈読む〉〈自己〉、そして〈他者〉表象としての「南京の基督」—同時代的コンテクストの中で」（『芥川龍之介研究』2007年9月）p. 14

<sup>3</sup> 孔月「〈病〉と植民地との出会い—芥川龍之介「南京の基督」論」（『文学研究論集』2008年1月）

<sup>4</sup> 参照：斎藤政一『生殖器之研究：並に其の疾病療法』（独立閣書店、1915年10月）  
中村重治『花柳病の話』（1917年10月）  
赤津誠内『恐ろしい性病の根治と伝染予防』（広文堂、1926年1月）

<sup>5</sup> 森嘉兵衛、谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第七巻』（三一書房、1970年3月）p. 98 下線は引用者による。

<sup>6</sup> 『芥川龍之介全集 第11巻』（岩波書店、1978年6月）p. 72

<sup>7</sup> 孔月、前掲論文 p. 214 注31

<sup>8</sup> サム・キーン『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』佐藤卓己、佐藤八寿子訳（柏書房、1994年10月）p. 71 下線は引用者による。

<sup>9</sup> 孔月、前掲論文 p. 213

<sup>10</sup> 『芥川龍之介全集 第4巻』（岩波書店、1977年年11月）p. 139 下線は引用者に



よる。

- <sup>11</sup> 山下安太郎『通俗淋病梅毒根治療法』（弘成堂、1906年10月） p. 88-89
- <sup>12</sup> 加治時次郎『性慾と道德並に性病の撲滅新論』（生活社、1927年5月） p. 27-28
- <sup>13</sup> 溝部優実子『『南京の基督』—〈少女〉／〈娼婦〉としての金花』（『芥川龍之介研究年誌』 2011年7月） p. 39
- <sup>14</sup> 参照：注4に同じ。
- <sup>15</sup> 前掲、『芥川龍之介全集 第4巻』 p. 134
- <sup>16</sup> 前掲、『芥川龍之介全集 第4巻』 p. 149
- <sup>17</sup> 中村三春「混血する表象——小説「南京の基督」と映画『南京の基督』（『日本文学』 2002年11月） p. 17
- <sup>18</sup> 『芥川龍之介全集 第7巻』（岩波書店、1978年2月）
- <sup>19</sup> 前掲、『芥川龍之介全集 第4巻』 p. 145
- <sup>20</sup> 中村三春、前掲論文 p. 17
- <sup>21</sup> 前掲、『芥川龍之介全集 第4巻』 p. 149
- <sup>22</sup> 王書璋「芥川龍之介における中国女性観の変貌——「南京の基督」、「湖南の扇」を中心に」（『日本近代文学と性』 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第152集 2007年3月） p. 36-37
- <sup>23</sup> 参照：関口安義『芥川龍之介 闘いの生涯』（毎日新聞社 1992年7月）  
 関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 1999年3月）  
 奥野久美子「恒藤恭、芥川龍之介の日露戦争：トルストイの読書体験とあわせて」（『大阪市立大学史紀要』 2014年10月）  
 塚本章子「芥川龍之介「軍艦金剛航海記」論—第一次世界大戦と軍備拡張の時代の中で—」（『国文学攷』 2015年3月）
- <sup>24</sup> 諏訪三郎「敗戦教官芥川龍之介」（『中央公論』第67巻第3号 1952年3月） p. 157  
 下線は引用者による。

## 参考文献

### 【全集】

- ・『芥川龍之介全集 第4巻』（岩波書店、1977年年11月）
- ・『芥川龍之介全集 第7巻』（岩波書店、1978年2月）
- ・『芥川龍之介全集 第11巻』（岩波書店、1978年6月）

### 【新聞】

- ・『読売新聞』 1912年12月12日

【書籍】

- ・赤津誠内『恐ろしい性病の根治と伝染予防』（広文堂、1926年1月）
- ・加治時次郎『性慾と道徳並に性病の撲滅新論』（生活社、1927年5月）
- ・キーン・サム『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』佐藤卓己、佐藤八寿子訳（柏書房、1994年10月）
- ・斎藤政一『生殖器之研究：並に其の疾病療法』（独立閣書店、1915年10月）
- ・関口安義『芥川龍之介 闘いの生涯』（毎日新聞社 1992年7月）
- ・関口安義『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房 1999年3月）
- ・中村重治『花柳病の話』（1917年10月）
- ・森嘉兵衛、谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第7巻』（三一書房、1970年3月）
- ・山下安太郎『通俗淋梅毒根治療法』（弘成堂、1906年10月）

【論文】

- ・王書璋「芥川龍之介における中国女性観の変貌——「南京の基督」、「湖南の扇」を中心に」（『日本近代文学と性』千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第152集 2007年3月）
- ・奥野久美子「恒藤恭、芥川龍之介の日露戦争：トルストイの読書体験とあわせて」（『大阪市立大学史紀要』 2014年10月）
- ・孔月「〈病〉と植民地との出会い—芥川龍之介「南京の基督」論」（『文学研究論集』 2008年1月）
- ・秦剛「〈シンポジウム〉「南京の基督」を〈読む〉〈自己〉、そして〈他者〉表象としての「南京の基督」—同時代的コンテクストの中で」（『芥川龍之介研究』2007年9月）
- ・諏訪三郎「敗戦教官芥川龍之介」（『中央公論』第67巻第3号 1952年3月）
- ・張如意『南京の基督』試論—芥川における中国社会認識—（『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』 2005年3月）
- ・塚本章子「芥川龍之介「軍艦金剛航海記」論—第一次世界大戦と軍備拡張の時代の中で—」（『国文学攷』 2015年3月）
- ・中村三春「混血する表象——小説「南京の基督」と映画『南京の基督』（『日本文学』 2002年11月）
- ・溝部優実子『「南京の基督」—〈少女〉／〈娼婦〉としての金花』（『芥川龍之介研究年誌』 2011年7月）

付記

本研究は中国国家建設高水平大学公派研究生項目の助成を受けたものである。